

●講演会● テーマ「地球を感じる女性たち」

1997年12月12日 於 京都府国際センター

1997年度海外研修KYOのあけぼの会講演会事業が、新京都駅ビル内の京都府国際センターに於いて開催されました。第一部は、大阪国際女子大学の、瀬地山先生のお話を聞き、引き続き、スリランカ国出身で、京都府名誉友好大使の、ニシヤンタさんと、瀬地山先生とのトークが行われました。第二部は、ホテル・グランピアで、会食懇親会が持たれ、会員相互の交流を深めることができました。その後希望者は駅ビルの見学をし、和やかなうちに、充実した研修会を終了しました。

大阪国際女子大学・女子短期大学助教授
WTC顧問 瀬地山 滢子

私はこの「地球を感じる女性たち」という題をいただいて、さて、いつ自分は地球を感じたんだろうと考えたとき、お産のとき地球をまるごと感じたなあということを思い出しました。私は、大学を出てすぐNHKに入ったのですが、そこは非常に男性社会で、女性はほんの少数で、独身の方、結婚して子供は産まないで形で仕事しておられました。私はどうしていいかわからない、そういう試行錯誤の中で、第一子を産むのですが、病院に入って、いざ産むとなったとき、母が非常に神々しく見えたのを覚えています。陣痛が始まってから凄いいイメージが起って来たのです。「そうだ、これって、太古の昔から、女はこうしてたんだなあ」という思いがどういふわけか、歴史を飛び越えてまるごと女の人という感覚があったのです。それと同時にどこの民族であれ、どこの国であれこうやって子どもを、命を産んで来たんだなって感覚がパツと、蘇ったって感じなんですね。それまでは、できる限り女を否定しようとして走り回っていました。そのとき初めて、女の人への連帯、女の人とほんとに一緒に生きていこうという気持ち、それが私にとって「地球を感じる女性たち」といわれるときの原点かも知れないと思ひまして、こういう題を与えられたことを今とても幸せだと思っています。

この事を思い返すと、実は「お産」を考えることは、私たちの近代の文化を考える上でも、私たちの生き方を考える上でも、非常に面白い、重要な題材だということに気付きました。

日本では、赤ちゃんは、平日の午後2時に生まれると言われてます。土日、夜中、夜明け、先生と看護婦の手が少ない時を避けて工場生産のように、病院で管理されているからです。そのためには、一般に陣痛促進剤といわれているものを使います。陣痛促進剤で生まれたお子さんに、非常に脳障害が多いのです。自閉症、または脳性マヒ。それからお母さんの方に、医療は進んでいるにも関わらず、先進国の中で、妊産婦死亡が若干高いんです。自然のお産ですと、赤ちゃんとお母さんが、互いにホルモン連絡しながら、陣痛というのが起こり、準備の整ったところで生まれるという、複雑な状況の中で出産するわけなんです。ところが何の連絡もなく、準備もないとき、薬で陣痛を起こすと、個人差の強い薬ですので、赤ちゃんやお母さんにこういう結果が出る恐れがあるわけです。

お産というのはぎりぎりまで健康なだけけれども、いったん何かあると大変危険な状態が背中合わせにあるという理由で、助産院へ行きたいんだけど、私たちは、病院へ行っています。そこで、一番いいのは、病院の中に助産婦さんの体制や地位をきちんと確立して、お産は助産婦さんがやるんだ、お医者さんじゃないんだ、自然分娩が主軸なんだと、という形に、病院の中がなればいいんです。

これだけ問題が起こったんだから、医者は変わってほしいと思ひますが、根本的に自然分娩でやりましょう、という考え方がなかなかない。しかも、今の医者には自然分娩のノウハウがありませんから。

だから、本当に変わるっていうのは、女の人がよく一生懸命、自分たちの声をあげていかないとなかなかできないことなんです。日本では、今少子化ですので、産婦人科は、院内をピンクの壁にしたり、お食事を贅沢にすることはあっても、根源的なお産の姿勢を変えることはやっていません。

それはやっぱり産む側の女がしっかり言っておかないと、なかなか変わらない事だと思う。だから、若い人たちは、力をふりしほって自分たちのお産を作りあげていかないといけないし、私たちは、まわりでそれをサポートしたり、産婦人医と話したり、地域で運動を起こすとか積極的にやっていきたいなあと思っています。

そうやって「産まされていたお産」から、自分たちが「産むお産」へと変えること、そのこと自体が私たちは、民族のちがひ、歴史のちがひを越えて、地球をまるごと女たちが感じて、ぱつと話が通じ合うことだと思ひます。そこを頂点にしているんことを考えていくと、環境問題もそうですし、人が生きるということは、どういうことなのかというその原点のところで、私たち女性は大事な役目を持っているんだと実感します。

男女平等、役割も均等。私たちも仕事をしていくから、男の人でも家の中の事もしてほしい。なればこそ、お産は、お医者さんに任せられるのではなく、私たちが責任を持っています。という姿勢は大事な事だと思っています。

そういう若い人たちの手助けをしながら、私たちが地球を感じ合っ、命、地球、そして地球で生まれる命、というイメージを、つ



ながていつ膨らます楽しさを、私たちは持っているんだなあということを、自分でも再確認させていただきました。ご静聴ありがとうございました。

—— 瀬地山先生 and ニシヤンタさんトーク抜粋 ——

【瀬地山先生】ニシヤンタさんは、スリランカの御出身だそうですが、スリランカではまだ内戦が続いていると聞いたんですけど、誰と誰が戦っているのでしょうか？ 徴兵制はないわけですね。民族がどうなっているのか、説明してもらえますか。

【ニシヤンタさん】兵隊は志願制です。スリランカは、多民族・多宗教・多言語国家と言われていて、シンハラ民族が一番多く、次はタミル民族で、ムアール民族という民族もいます。言語も、民族が変わると変わって、シンハラ民族は、シンハラ語を、タミル民族は、タミル語を喋りますし、宗教も、シンハラ族は仏教徒で、タミル族はヒンズー教徒と変わってくるんです。今回の問題は、政府に反対する少数民族の中の一部過激派が、政府に対して喧嘩を始めたのがきっかけです。スリランカは、百年間に亘ってイギリスの支配を受けてきて、英語が公用語でした。それが、政府の交代と共にシンハラ族が喋るシンハラ語を公用語にしたのが最初のきっかけなんです。

それともう一つ、領土問題もあるんです。タミル人が北部に多くて、タミル人が、そこを分けてほしいと、政治的独立を要求している。それが、いつの間にか、タミル人対シンハラ人と発展するんですね。

実は僕、幼稚園から大学迄全部全寮制の男子校だったんですけど、そこに、タミル人もシンハラ人も一緒にいて、何の問題もなく同じラグビーチームと一緒にいろいろやっていたんですよ。今ではチームの半分位のメンバーが亡くなっています。戦争があることで海外からの投資がなく、仕事がない。働くところないから、みんな軍隊に行ってしまうんです。軍隊に行ったら死んでしまう。最近悪循環ですが、それに友たちが、同級生が巻き込まれて、今度帰国して、何か言おうと思って帰ったらもういなかった。寂しいですよ。一日も早く平和なスリランカに戻ってほしいと思ひますけど。

【瀬地山先生】男の人と女の人の関係はどういう関係になっていますか。女性の地位とかはいかがですか？

【ニシヤンタさん】有名な話やと思うんですが、世界初の女性大統領はスリランカです。バンダラナイケって言って、ご主人が最初の大統領で、その次に奥さんバンダラナイケ女性大統領になって、今、彼女の娘が大統領で、お母さんが今首相になっている。

女性大統領がいるくらいですから、日本とは全然違う。女性の会長とか、女性の上司とかいて、男性の部下がいても全然普通なんです。どういふふうに決まってくるか、という教育です。教育をどれだけ持っているか、能力がどれだけあるか、で決まるのであって、男性女性っていうようなものは全然関係ないですね。女性の管理職も多いです。

【瀬地山先生】働くのは、パートタイム？ フルタイム？ 結婚して辞めて、またすぐフルタイムの仕事に戻るわけ？ 家庭の中での役割分担とか、どうなんでしょうか。

【ニシヤンタさん】スリランカでは、アルバイトという概念はなく、みんなフルタイムで社員です。女性が結婚して、子育てし就職しようとする、社会的にすごくサポートされていて、出産後の休みが3カ月もらえる、その後も早く帰らせてもらえるとか、会社でやってくれるみたいです。もう一つ日本と大きく違うのは、物価が安かったんで、女性が生産活動に参加しなくても父さんの給料でやっていけたんですよ。今はインフレ状態で女性も参加することになってきていますが、そして家の中が忙しくもないんです。お父さんは会社人間でないんですよ。あくまで会社は金儲けの手段であり場所であると。5時きっちり帰ってくる。僕が小さい時、父は昼休みを使って、お風呂入れに来たっていうんですよ。母に任せると危ない、お前にできひんからといって入れてみたいですよ。頭刈ったりするの。で早く帰るんです。料理はしませんでした。庭の手入れとか、重い仕事は彼が引き取ってやりました。会社の給料も、よほどの重労働でない限り、男女の差は無く同じなんです。

【瀬地山先生】日本に長くいらつしゃって、日本をどのように見ていらつしゃるか、ご専門の日本の経営という視点からでもいいし日本を見て、いろんな感想をお願いします。

【ニシヤンタさん】僕は、京都に骨を埋めるつもりでいますけど、外国人の僕は、なかなか受け入れてくれないなあ。お互いに全然利益に関係ないところやったら、親しくさせていたたいても、いざっていつか、やっぱり使ってくれないってところありますよね。もう一つ、男女平等とってアメリカばかり見ているような気がします。全てを合理的に、そしてお金と、この2つのキーワードでやっちゃうんですよ。だから、愛とか情けとか少なくなっていると思うんですよ。発展途上国の中でも、参考になる材料がいっぱいあると思います。

「地球を感じる女性たち」との演題に引き付けられ、海外研修KYOのあけぼの会講演会に参加させて頂いた。それはまさに、地球に掛け替えのない尊い生命を生み出す女性の、一大イベントである種々なお産を通して、女性が感じる地球の重さのことはなかったかと思つた。科学の進歩と共に、医学も急速な進歩を遂げている今日こそ、今一度原点に帰り、地球を感じる生命を生み出す女性としての誇りと責任を、21世紀を担う若い女性達に自覚してほしいと思つた。

鈴木初子（ガールスカウト）

平成8年11月海外研修に参加、その後総会に出席した時、講演会に出席した時にも感じた事ですが、皆さん立派な方々ばかりで私は場違いをしたのではないかとつくづく思いました。今回の講演会で、瀬地山先生のお話の中にありました出産の時の陣痛誘発剤の事については、一昨年私の二女がお産をしましたが、1月5日の予定日が12月24日に産まれた事もあり、改めて考えさせられました。懇親会の時は、ニシヤンタさんと同じテーブルになり、楽しいひとときを過ごすことが出来、プレゼント交換の品も、サンタクロースの帽子が当たり、孫へのいいお土産になりました。今後もできる限り参加させていただこうと思ひました。

森本 節子（農業士会）